

事業報告

平成29年度 教育事業 クリスマスマイスター

平成29年11月18日(土)～19日(日)

【対象】親子(小学3年生以上の子どもとその家族)

【場所】国立信州高遠青少年自然の家

～趣旨～

各家庭で行うクリスマス行事がより楽しく充実したものになるよう、家族間の交流を図りながら、必要な知識・技術を身につけるきっかけとする。

～主催～

主 催：独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立信州高遠青少年自然の家

～活動日程～

時	10		11		12		13		14		15		16		17		18		19		20		21	
11月18日(土)		受付	開会式	アイスブレイク	昼食		クリスマスリース作り		散策		リース作り		タベのつどい	夕食		クリスマスキャンドル作り		入浴		消灯・就寝				
時	7	8	9	10	11	12																		
11月19日(日)	起床	朝のつどい	朝食	部屋清掃	ブッシュドノエル作り	閉会式	解散																	

～参加者～

20家族(大人：25名、中学生：1名、小学生：25名、幼児：5名) 計：56名

(長野県、東京都、埼玉県)

～活動トピックス～

活動Ⅰ クリスマスリース作り

講師：信州高遠青少年自然の家 職員

自然の家周辺で取れた自然素材のみを使い、オリジナルのリース作りを行った。つるを自分で巻いてリース土台を作るところから挑戦し、親子で協力しながらつるを巻いている様子が見られた。飾り付けにはピラカンサやバラの実の赤や、ヒノキやモミの葉っぱの緑、カラマツの松ぼっくりの茶色等、様々な自然の色を上手に使って、思い思いのクリスマスリースを完成させていた。制作後の作品お披露目会では、輪の形にこだわらない、個性豊かなリースが並んでいた。



活動Ⅱ クリスマスキャンドル作り

講師：信州高遠青少年自然の家 職員

自然の家の活動プログラムでもある「デコレーションキャンドル」を、クリスマス風にデコレーションした。手の温もりで柔らかくなって簡単に加工できるシートワックスを使い、粘土遊びの要領で平面から立体まで自由な飾りを作ってキャンドル土台に貼りつけた。

小さな子どもから大人まで自分の世界に没頭して制作し、特に子ども達は驚くほど細かい細工を作ったり、大人が思いつかないような独創的な発想でデコレーションしたりして、その才能に保護者が驚いている場面もあった。



活動Ⅲ ブッシュドノエル作り

講師：信州高遠青少年自然の家 職員

クリスマスケーキの定番、ブッシュドノエル作りを、土台となるロールケーキを巻くところからおこなった。根気が必要な生クリームの泡立てに始まり、大きなロールシートを巻くときには自然と親子で息を合わせ、外側をデコレーションするときには親子で相談して完成イメージをすり合わせながら、家族一体となってブッシュドノエルを作り上げている様子がうかがえた。

作る前には丸まる一つ食べきれぬかどうか心配していた家族が、自分達で作った喜びと美味しさからか、満面の笑みで「全部食べてしまいました！」と話していたのが印象的だった。

～参加者の声～

- 普段はつい面倒で、外での遊びや親子でもの作りを楽しむことをしないが、改めて楽しむだけの時間をもつと、大人も子どもも笑顔になることが分かり、少しでもいいから普段の生活の中で自然にふれあう機会をつくりたいと思った。
- とても充実した内容で大満足。自然とふれあえたり制作したり、非日常な時間を楽しめた。
- 親子で色々と経験でき、子どもの意外な一面を見ることもでき、とても楽しむことができた。
- キャンドル作りは創造性が必要で、その点で子ども達の方が素晴らしかった。

～成果と課題～

- 天候状況から、1日目の最初の活動を家族交流のアイスブレイクに切り替えたが、結果として以降の活動における他家族との交流が促進され、時間的にも参加者の精神的にも余裕が生まれ、高い満足度（満足95%、やや満足5%）に繋がったと考えられる。
- 最初のオリエンテーションにて「当事業期間中に、自分の家族はもちろん他の家族の良いところをたくさん見つけて、たくさん“いいね”と直接伝えてあげてください」「当事業はあくまで“きっかけ”なので、事業の中でたくさん技術を習得して、帰ってからクリスマス本番までにさらにスキルアップできるよう、受け身ではなく積極的な姿勢で活動に臨んでください」と声かけをしたことで、参加者が積極的に他家族と交流し、活動中も飽きることなく創造性を追求している姿が見られた。事業の趣旨に沿った参加者の姿を2日間通して見る事ができた。
- 告知において、当事業の1か月後に開催予定の低学年向けクリスマス事業との分かりやすい差別化ができておらず、イメージが曖昧なまま参加してしまった参加者もいた。
- 子どものみの事業と違って親子事業とは言え、60名弱の参加者に刃物を使わせたり、屋外に連れて行ったりする活動内容からして、職員2名体制では安全管理上難しい局面が出てくる。同じ内容で同じ人数規模であれば、職員3名以上の体制が望ましい。
- 参加者の体験の機会は維持しながらも、怪我等の事故発生を防ぐために、道具の使用に関するルールの工夫や、より効果的な説明、現場の雰囲気による臨機応変な判断等の質を高める必要がある。